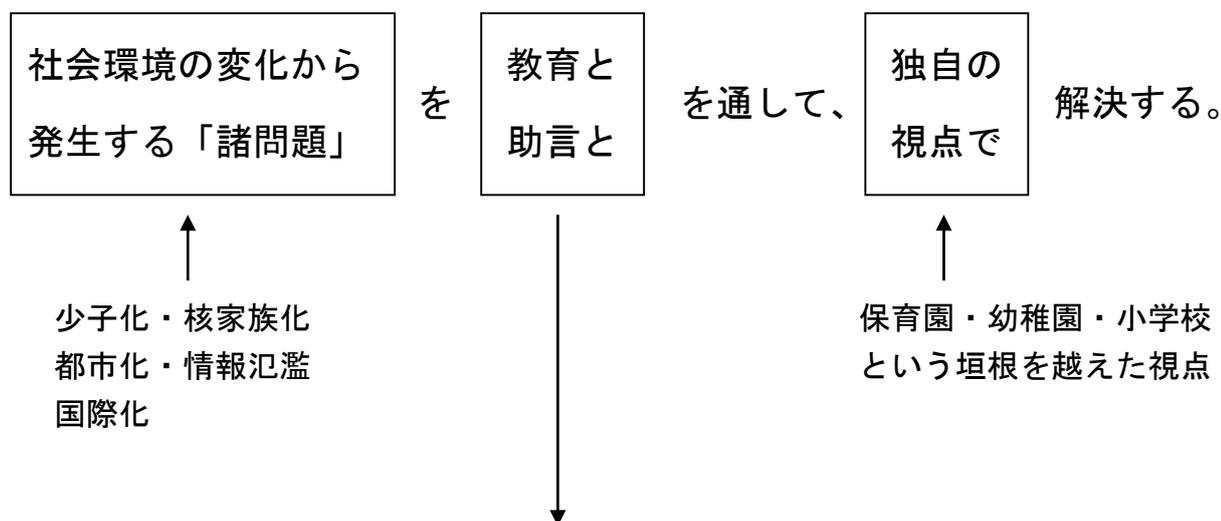


自 令和3年4月 1日

至 令和4年3月 31日

令和3年度 事業報告書



1. 教育事業（教育実践を通して）

- (1) 人と関わる力の育成（幼児とその親）…………… 2
- (2) 考える力の向上（幼児・児童）…………… 3
- (3) 体を動かす力の習得（幼児・児童）…………… 5

2. 相談・助言事業（解決方法を研究し、成果をより多くの人に）

- (1) 育児・教育に関する相談と助言…………… 6
- (2) 実践研究とその成果の公開…………… 6

3. その他（地域社会への還元）

- (1) 文化的活動の「場」の提供…………… 7
- (2) 震災時に避難する「場」の提供…………… 7

1. 教育事業（教育実践を通して）

前記スタンスに基づき、下記のような教室を設置し、社会的諸問題の解決に当たった。

（参加人数は最多在籍月の数値）

（1）人と関わる力を育成する教育

公益目的支出事業①

■はじめての教室（対象：1歳～3歳の幼児とその親）

【内容】 他の親子と継続的に関わりあう「場」を設定し、広々とした環境の中でクラス担任のリードの下、幼児には遊びを通して社会性を身につけさせ、親には適宜、アドバイスをしたり勉強会を開催したりしながら子育てに関する不安を解消させる。

【結果】 今年度も多くの親子が上記のねらいに沿って活動に参加した。

昨年に続き今年度も「コロナ」の対応に追われた1年間となった。蔓延防止等重点措置や緊急事態宣言が出される度、保護者へ向けて当校の対応等について丁寧に説明を行い理解が得られたため1学期・2学期は、時差や時短による保育にはなったが1日も休校することなくなくほぼねらいに沿った活動が行えた。3学期に入ると感染力の強いオミクロン株の出現により各教室から陽性者が確認されたため、数日から数週間の休校を余儀なくされ、子ども同士が触れ合うことで心身の成長を促す本教室にとっては、大きな打撃となってしまった。

しかしながら1年間を振り返ると、そのような状況下にあっても感染対策と経験に基づいた工夫により以下の通りの保育が実践でき、保護者の理解も得られた。

≪1歳児コース≫

親に見守られた安心した環境の下、指導者の言葉に耳を傾け、制作や運動、リズムなどの活動に取り組む中で、他者（他の幼児・親・指導者）の存在を意識した行動がとれるようになり、社会性の芽を育てることができた。

≪2歳児コース≫

親から離れての活動になり、可能な限り自分のことは自分で行う姿勢が身につくとともに、集団の中での一員という意識を芽生えさせることができた。ただ、今年度も感染防止の観点から食事を通した学びを十分に経験させられなかったことが悔やまれる。

《3歳児コース》

今までの活動経験から指導者の指示にしっかり従う姿勢が育まれているため子どもの感染対策も行き届き、分散保育も少なくできた。集団での遊びや共同作業を多く体験することで、他者と力を合わせたり他者を思いやったりする心も育てることができた。

参加者 親子 124 組

内 訳 1歳児親子 39組（週1回・年33～34回の保育）

2歳児親子 66組（週2回 or 3回・年64～96回の保育）

3歳児親子 21組（週4回・年132回の保育
および4日間の夏季特別保育）

保護者に対する指導 1歳児保護者対象に年2回の育児講座ほか
2・3歳児保護者対象に年2回の育児講座。
希望する保護者に対する個別のカウンセリング。

（2）考える力を向上させる教育

■言語力UP教室（対象：3歳～5歳の幼児）

【内容】 将来、論理的思考ができる人間に育てるため、「幼児なりに」筋道を立てて物ごとを考える経験をさせておく。

【結果】 今年度も「見る力」「聞く力」「考える力」「話す力」の育成を目指し学齢ごとに様々な切り口から授業を行ってきた。年少児の「考える力」においては、「どちらがどのくらい大きい？」「どちらがどのくらい長い？」のような「量」の感覚を「比較」させることを通して養ってきた。大抵の場合、子どもは「大きい・小さい」で済ませてしまうが「量」を表す言葉を習得することにより、その表現を区別できるようになった。

例えば…年少児においては《重さ》「お父さんの革靴は重い・ぼくの運動靴は軽い」、《広さ》「公園は広い・お部屋は狭い」、《多さ》「お兄さんのご飯は多い、私は少ない」《高さ》「大人は背が高い・子どもは低い」、《大きさ》「バスタオルは大きい・ハンカチは小さい」、《長さ》「お母さんのブーツは長い・ぼくの長靴は短い」など。

さらに年中児・年長児において《幅》「目白通りは広い・家の前の道は狭い」、《厚さ》「図鑑は厚い・絵本は薄い」、《深さ》「プールは

深い・水たまりは浅い」、《道のり》「お爺さんの家までは遠い・駅までは近い」などを扱い、年少児から年長児までの3年間で小学生の算数に繋がる「量」の感覚を身に着けることが出来た。

感染対策を講じつつ授業を進めてきたが、3学期においては全館休校となったことに伴い休講日が発生、各学年30回～31回の授業となった。

参加者 幼児 62人

内 訳 3歳 32人 (週1回・年30～31回+言語力診断各1日+夏季特別授業1日)
4歳 20人 (週1回・年31回+言語力診断各1日+夏季特別授業1日)
5歳 10人 (週1回・年31回+言語力診断各1日+夏季特別授業1日)

■学習力UP教室・夏季学習教室 (対象：小学生)

【内容】 コロナの影響から十分な学校生活を送れない中、当校において基礎学力の定着を中心に確実な学力の底上げを図った。基礎学力の充実は学習意欲の素となり、さらに内容を深めた発展的・応用的な学習に向かうため必須の過程である。常設教室では教師1人に対し子ども1人または2人で実施しているが、昨年実施を見送った夏季教室でも感染防止の観点から5～6人という少人数で開催することとした。

【結果】 もともと常設教室は個別指導のため、感染のリスクは低いが3学期においては他教室で感染者が発生し全館休校としたため休講日が生じてしまった。休講日については振替と指導者による家庭学習の指示により、保護者の協力も得られ、基本的な学力の定着化が図られたため、概ね当初のねらいは達成できた。夏季教室も安全対策を優先し1学年5～6人の少人数で実施する形態をとったが、同時開催の体育派遣講師の感染が確認されたため6日間の予定が3日間の短縮日程となった。しかしながら基礎固めを中心に実施した内容について2学期以降の学力の向上に繋がったと参加した保護者より後日高評価を得た。

参加者 常設教室 小学生 8人 (週1回・年31～32回)
夏季教室 小学生 (夏休み3日間集中)

(3) 体を動かす力を習得させる教育

■体育教室（対象：2歳児～児童）

【内容】 幼児には、歩く・走る・投げる・回るなどの基本的な体の動きが「満遍なく」できるようにし、「体を動かすことの楽しさ」を幼児期に覚えさせる。

児童には、自分の体を操る基本的能力を「いろいろな運動」を通して身につけさせ、運動に対する「苦手意識」を持たせないようにする。

【結果】 オリンピックの影響もあり特に体育の分野においては、習い事の裾野がさらに広がった。「トランポリン」「スケートボード」「MTB」など、新種の教室が目白押しである。しかし、これらの動きはともすれば偏った運動能力を育てやすいという側面もある。当教室では幼児にはすべての動きに繋がる基礎的な運動能力の習得に重点をおき、小学生には「マット」「鉄棒」「跳び箱」を中心とした器械体操に多くの時間を割き、体を操るための基本的な動きを習得させ、バランスのとれた運動能力を育成してきた。また、学ぶ過程においては、各運動の動きを細分化し、「スモールステップ」で順を追って修練させることによりそれぞれが成長を自覚できるようになり、より意欲的に取り組む子が増えた。

感染対策を講じつつ授業を進めてきたが、3学期においては全館休校としたため休講日が発生、各学年32回～33回の授業となった。

夏季教室も安全対策を施しながら実施したが、派遣講師の感染が確認されたため6日間の予定が3日間の短縮日程となった。しかし、その後、補講を行うことで所期の目標を達成することができた。

参加者 幼児 125人（週1回・年間32～33回＋夏季集中授業3日 補講1日）
小学生 28人（週1回・年間32～33回＋夏季集中授業3日 補講3日）

■剣道教室（対象：小学生・中学生）

【内容】 剣道を通して心身ともに自己を強く逞しくする。

【結果】 厳しい指導をすると親からクレームが来るような時代になったが、当教室では保護者の理解を得て、剣道を通して「与えられた課題に全力で取り組む」ことを子ども達に厳しく求めている。その厳しさを理解する子どもも増え、最近では稽古前に来て練習する姿が多くなった。

今年度は、相次ぐ緊急事態宣言や蔓延防止等重点措置により、休講日数が他教室に比べて多くなった。剣道は対面での接近場面が多く、また、声を出すなど飛沫のリスクも懸念される事などから大事をとった結果であり、やむを得なかったと判断している。

参加者 小学生 11名 （週1回・年29回）
中学生 1名

2. 相談・助言事業（解決方法を研究し、成果をより多くの人に）

（1）育児・教育に関する相談および助言

公益目的支出事業②-1

【内容】 以下のような形で育児や教育に関する相談を受ける。

- ①前記教室に参加する親からの相談を随時受ける。
- ②教室に通えない親の電話相談や来訪相談等にも応じる。

【結果】 ①に関しては2～4歳児の保護者から延べ169件の相談があった。相談の多くは子どもの特性と幼稚園に関わるものであった。②に関してはコロナ禍のため、常設教室在籍者以外の来館を極力避けたこともあり、今年度は36件にとどまった。相談内容としては幼児期の社会性を育むための育児に関するものであった。

（2）実践研究とその成果の公開

公益目的支出事業②-2

①帰国外国人児童生徒教育の支援

【内容】 日本語力が不十分な児童生徒の言語習得、教科学習フォローの仕方について、小中学校等の教員、ボランティア団体指導者の研修をする。外国人等の入国者は新型コロナの影響で減少はしているものの、すで

に来日して就労している家庭は多く、幼稚園・学校などで日本語指導を要する児童生徒が平成30年調査で5万人を超えている。過去、先進的な研究と実践をしてきた当財団の知見を提供することは依然として重要だと認識している。

【結果】 今年度も講演の依頼があったが、コロナ禍のため Web での開催を希望するものだった。当方の研修は実物の教材を提示したり、実演したりするもので、Zoom では意図や教材提示効果が伝わりにくく断ることになった。代替案としてメールや電話での相談を受けるとともに、教材を作成しホームページにアップすることで学校現場の教員等に活用してもらった（後述）。

②研究・調査とその公開

【内容】

ア) 外国人児童生徒用教材の公開

外国人児童生徒に対する日本語指導は、最近では教科指導へと広がりを見せており、日本語講師や国語の教員では十分に対応できないことも増えてきた。そこで易しい日本語で書かれた教材を作成し希望者に対し配布した。希望者への配布以外にもインターネットによる教材送信をするとともに、ホームページ内に教材紹介ページを立ち上げ、日本語指導と教科指導の複層的指導のための教材がどうあるべきかのモデルを示した結果、924 のアクセスがあった。

イ) 作文教材の公開

感想文が主体の日本の作文教育に一石を投じた「発信力 UP 教室」（現在は生徒募集をしていない）における教材開発の成果を、多くの教育関係者に利用してほしいと思い、令和2年度より教材の整理と公開を開始した。論理的な思考力に基づいた作文にするため、まずは短い文章で事象を的確に表わすための教材を公開した結果、1209 のアクセスがあった。

3. その他（地域社会への還元）

財団の事業としては位置づけていないが、必要に応じて次のような協力をした。

（１）文化的活動の「場」の提供

【内容】近年、地域の人々の文化的活動が活発になってきているにも拘わらず、公民館などの公共の場の確保が難しくなっている。そこで、活動の場を無償または実費で提供することで、文化的活動のサポートを行う予定であったが、コロナ禍で全て中止となった。

（２）震災時に避難する「場」の提供

【内容】耐震化を進め、震災時に地域の人々の避難場所となるようにする。

【結果】今後、予想される東京直下型の地震の時は、会員でも相当多くの帰宅困難者が出るほか、歩いて帰宅する一般住民が途中で帰宅を断念し、宿泊する場所を必要とすることも考えられる。そのような事態に対応できるよう毛布や食料などの備蓄量を増やす方向で検討を進めている。今年度は幸いにもこの協力をしなくてもすんだ。



Hatano Family School